
魔術師と不運な騎士

千姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師と不運な騎士

【Nコード】

N0143BA

【作者名】

千姫

【あらすじ】

パレス大陸のリアリ国に、かつて取り替え子にあいかけ、魔力を持ってしまった少女が居た。

魔術師を信じないリアリ国の住民によってその少女は避けられていたが、ある日、長らく音信不通だった幼馴染から手紙が来る。

出会った幼馴染は、魔術師による呪いで超絶不運体質になりながらも騎士団長になっていた。

第一話「手紙」(前書き)

- ・この小説は一次創作です。実在する人物、団体、出来事、地域などは一切関係ございません。
- ・誹謗中傷はお辞め下さい。

第一話「手紙」

パレス大陸 リアリ国。

其処は南以外の周囲を山々に囲まれ、南方面には海、と、他国へ攻めることも他国から攻められることもない平和な国だった。ただし、そんな周囲の自然に恵まれたため、進んで他国と友好的になるうとはしなかったため情報が少なく、少々 いや、よく言えばかなり現実的、超常現象はありえないものだと言っていた。

そして、その超常現象を引き起こす魔術師は、リアリでは避けられていた。

リアリ国、ど真ん中に位置するミドル都市の外れ、石畳の緩やかな坂を登ると、質素な山小屋を思わせる一軒家が建っている。其処に、一人の少女と青年が住んでいる。

取り替え子に遭いかけ、魔力を受け継いだ少女と、その少女を世話する青年が住む家。其処には滅多に、人が近づかなかった。

四月の、陽が昇りきつてすぐの早朝。

腰まで伸びた薄金色の髪が印象的な十代後半の少女が、綺麗に手入れされた庭を通り抜ける。門に設置されたポストに手を突っ込むが、其処に求めているものはなく、冷たい鉄の感触が指に触れた。

「今日も、新聞は来て無いのね」

灰色の目が残念そうに伏せられる。

『リーシャ、元気出して！』

『そうそう、何れ来るって！』

空中を舞う小人たちがリーシャを元気づける。その小人たちの総称を、妖精フェアリーと言った。

元気づける妖精に少女 リーシャ・アイヴァーンは微笑む。

通常、妖精は人には見えず、声も聞こえない。妖精の力を利用し

て魔術を発動する魔術師か、リーシャのように取り替え子になった（正確にはなりかけた）子のみが見える。

ただ、魔術師とは違い、妖精は人々に八百万やちゅうまんの神と称えられていた。妖精がこの土地を造ったという説もあるぐらいだ。

「ありがとう、皆」

妖精たちはそんなリーシャの様子に満足して、顔を見合わせて笑いあった。

「あのー……リーシャ・アイヴァーンさんのお宅は此方ですか？」

門の外から、黒い制服に身を包んだ気弱そうな男が声をかけてきた。郵便局員だ。

「あ、は……」

「ああ、そうだ」

リーシャの背後からの男の音がリーシャの肯定を遮った。リーシャが振り向くと、其処には見知った青年が居た。

濃紫色の髪は肩につくくらいで、青い目は切れ長でないながらも鋭い光を放つ。端正な顔だちで、四月にしては、厚着されている服の上からでも身体に程良く筋肉がついていることが服の上からも窺え、鋭い雰囲気は人が近づくことを拒み、威嚇しているかのようだった。

実際、郵便局員は恐怖からか固まってしまっている。

「何の用だ？ 今更新聞を届けに来たのか？」

「い、いえ……」

「ソード！」

喧嘩腰の言葉を咎めたリーシャの声に、青年　ソードは息を吐き出した。

「……新聞も届けず、今更のこのことやってきた奴の気が知れんだ」

「ありがとう、ソード。でも、やっぱり届けてくれた人に喧嘩腰は駄目よ」

ソードは渋々といった感じで頷くと、一步後ろに下がる。リーシ

ヤがソードの前に出た。

「あの、私に何か用ですか？」

郵便局員は顔を青ざめさせながら封筒を差し出す。

「クロス・エンバルト様からです」

「クロス？」

何処かで聞いた名前に、リーシャは首を傾げる。

(何処だったかな……)

首を傾げつつ封筒を受け取ると、郵便局員は逃げるように走り去っていった。

ソードが背後で舌打ちをする。

「……ソード」

「わかっている。だが、あのような態度は不躰だとは思わないか」

「そうだとしても、この世の中には様々な人が居るんだから、一々怒っては駄目。私みたいな人とか、この子たちみたいな子とか」

そう言っってリーシャは空中で郵便局員の去っていった方向を睨んでいる妖精を、ツンとつついた。

ソードに妖精は見えないが、そうだな、とソードは頷く。

「それより、クロス・エンバルトって誰だっけ」

「幼馴染だろう、もう十年以上も会っていないから忘れるのも仕方がない」

(ああ、そっか、幼馴染……)

未だリーシャが五歳にも満たない頃、幼馴染のクロスは言った。

君が十六歳になったら、必ず迎えに行く。だから、誰とも結婚しないで待っていてほしいと。

そんな約束を、おぼろげに思い出す。勿論、迎えに来た人物等居ないが。

「約束は破らない男だと思っていたが」

複雑そうにソードが呟く。

「……そ、ソード、約束って……あの約束を知ってるの!？」

「何言っている。貴様達が、俺に無理矢理立ち合わせたんだろっ」

ソードが僅かに表情を綻ばせて、懐かしむように言った。

「それより、開けてみる」

ソードの言葉に、手で慎重に封を切る。中から出て来た手紙は、一枚だけだった。

「リーシャ・アイヴァーン様、季節の変わり目ですが、お身体にお変わりはありませんか。長らくお会いしておりませんでした。明日の昼頃に私の遣いを其方に向かわせます故、ソード殿と荷物を纏めてお待ちください、クロス……だって。えーと、手紙って大体ポストに入れた次の日に届くよね？」

「ああ、そうだな」

「……………それって、今日の昼来るってこと？」

「ああ、そうだな」

ソードは苦い顔で頷いた。急な話、というだけではなく、何故荷物を纏めなければならぬか、などの具体的な内容が書かれていないことや一方的な申しつけもソードを苛立たせているのだろう。

リーシャはそんなソードに思わず苦笑した。

びゅう、と未だ少し冷たい風が二人の間を吹き抜け、リーシャの髪を無造作に巻き上げる。

(クロス……どうなっているんだろう)

約十年ぶりに会うであろう幼馴染に、期待と不安を抱いて、リーシャは雲一つない薄青色の空を見上げた。

第二話「迎えの罖」

その日の正午　つまりは十二時丁度　に鳴らされた玄関の軽快なベルの音が、壁や床の木の香りと、パンやスープの匂いが混じり合って漂うリビングで食事していたリーシャとソードの耳に届いた。

「かなり早いな。少し見てくる」

「ありがとう、ソード」

ソードは齧っていたパンを皿に置き、席を立ってリビングを出て行く。

『リーシャ、此处出て行くの？』

寂しげな妖精の声に、リーシャは苦笑して首を左右に振った。

「多分、会いたいというだけだと思う。家を離れるとしても、二、三日程度だと思っわ」

『本当？』

途端、妖精の顔にぱあつと満面の笑顔が咲く。リーシャは微笑んで、頷いてみせた。

「リーシャ」

僅かばかり眉根を寄せたソードが、玄関側に顎をしゃくった。

「何？」

「迎えが来た。全く、礼儀知らずな奴だな」

「仕方ないわよ。食事時間はそれぞれだし、十二時丁度に私たちが食事をしてるなんて知らなかっただけ。だから、礼儀知らずとか簡単に言っちゃ駄目よ」

「……お前という奴は、温厚というかなんとというか」

眉間を指で押さえるソードに苦笑を返して、リーシャは席を立った。丁度、食事を終えた所だったからこっちとしては問題は無い。

「ソードの分の荷物も運んでおくから、ソードはお皿を片づけてくれる？」

「心得た」

対等のように話していても、幼馴染でいても、リーシャは主で、ソードは従者。主の言葉に首を左右に振ることは滅多にしないソードは、早速皿を台所へと運びだす。

リーシャはそれを見ると、妖精に微笑んで、荷物を運び出すためにリビングを出た。

濃い茶色のトランクケースを両腕に抱えたリーシャは、ソードより一足早く外へ出た。

左腕に抱える小さめのトランクケースがソードの物で、右腕に抱えるそれより一回り大きめの物が、リーシャの荷が入った物だった。眠たくなる様な心地良い風に吹かれ、リーシャは微笑んで整えられた庭を抜ける。玄関を出た所で、道の端に停めてある黒塗りの馬車と、それを引く馬に跨る白色の制服　この国の騎士団のものを着ている男がぼんやりと空を眺めているのを見つけた。

（あれ、騎士服……？　ということとは、クロスは騎士なの？）

いや、遣いなのだから、クロスの地位はそれよりもっと上か。それとも、騎士の知人に迎えを頼んだだけか。

リーシャが首を傾げていると、馬に跨った男が此方に気付いた。未だ若いが、今朝の郵便局員のように気弱そうでは無い。男はリーシャに気付くと一瞬意味ありげに笑み、馬から降りて近づいてきた。「初めまして。クロス・エンバルトの遣いの者です。ソード殿は？」
「ああ、今……」

背後で扉の閉まる音と、鍵を閉める音がリーシャの言葉を遮った。背後から不機嫌を隠しもしないソードが、リーシャに背を向けて男の前に立つ。

「幼馴染の起こす行動でなければ、遣いと遣いを寄越した奴を一発殴っている所だ」

「は……はは……」

男はその言葉に乾いた笑みを零す。リーシャは肩を竦め、ソード

の前に出た。

「あの、出発しませんか？」

その場の空気を変えるのと、早く幼馴染に会いたいという気持ちの半々で、リーシャは言った。男は安堵の息を吐き、二人を馬車へと促す。

流石にソードもリーシャの気遣いを感じ取らないということは無かったらしく、不機嫌さを引っ込めて歩き始めた。

カラカラという車輪の音が、リーシャの耳に心地よく響く。

リーシャは向かいに座るソードに尋ねた。

「ねえ、今どの辺り？」

「ああ、そうだな……。正確にはわからんが、ミドルシティの中央噴水まで後三十メートル程と言ったところか」

ソードの言葉に馬車の窓から外を見やると、成程、中央都市の真ん中近くとあって、家が増えてきている。

人々の楽しいげな声も、先程よりも大きく聞こえてきた。

と、その風景が徐々に変わり、木々の幹がその風景と声を遮る。

「え？ あれ、此処って森？」

「ああ、多分な」

ソードは大きめの声で尋ねた。

「おい、何故森に入る？」

「此方の方が近いので」

「近い？」

近いとはどういうことだろう。リアリでは同じ方向へ延びる道が多くあるため、真昼間でも人波に吞まれるということはほぼ無く、人の少ない森林でも、人のそこそ居る道でも時間的には変わりはない筈だ。

首を傾げるリーシャを余所に、馬車が突如何の脈絡もなく止まった。

「え、何？」

ソードが眉根を寄せる。

窓の外で、見たことのない緑色をした妖精が慌てたように手足を動かす。森林に住む妖精だろうが　何かをリーシャに伝えたそう
だ。

リーシャが首を捻った時、何かが焦げる様な臭いが鼻を突いた。

「火……！？」

「出る、リーシャ！！」

ソードに背を押されるようにして、馬車の外へと飛び出る。次いで、トランクケースを抱えたソードが馬車から飛び降りた。

リーシャが視線をはしらせれば、数メートル先の、未だ緑の落ち葉がパチパチと音をたてて燃えている。

ソードは火の点いた葉に駆け寄り、靴底で揉み消した。

『お譲さん、僕が見えるの！？』

「ええ、見える」

『今すぐ逃げて！』

先程何かジエスチャーしていた妖精が、リーシャのすぐ横で叫ぶ。
「リーシャ！」

ソードの鋭い声に、リーシャは声のした馬の方を見やる。だが、其処に呼びにきた男の姿は無かった。

代わりに、複数の足音が近づいてくる。数は十、二十……もつとか。

「どつやら、嵌められたようだな」

『危ない、リーシャさん！』

妖精の声と、上から降って来た深緑の葉がリーシャの右目を遮ったのは同時だった。頭上でがさあつ、と木の枝が揺れる音がした。

左目が刀を構えて飛び降りてくる男を捉える。リーシャは転がるように後ろに避けた。

その時。

キーン！！

甲高い金属音が、風に乗ってその場に響いた。

第三話「騎士団長」

甲高い金属音がその場に響いたかと思うと、リーシャに斬りかかった男はどさり、と音をたてて尻もちをついた。

「な……」

俯いていた顔を上げれば、リーシャを庇うように、青年がリーシャに背を向けて立っている。

突然の助太刀より驚いたのは、リーシャ達を襲わんと、いつの間にか囲んでいた男たちの表情が固まっていることだ。まるで、度の過ぎた悪戯を両親に見つけた子供の様な表情をしている。更に、その男たちの服は騎士団のものだったのだ。

助太刀に入った青年の低い声がその場に響く。

「おいお前等、誰の許可をとってこんな事してる？」

「そ、それは……」

助太刀した青年の言葉に、取り囲んでいた男たちが目を泳がせ、唇を開きかけては閉じることを繰り返す。

「誰だか知らんが、助かった。しかし、貴様はこの者達と知り合いか？」

ソードがその空気を取り払うかのように問う。男はああ、と声を漏らし、リーシャに向き直った。

黒茶色で僅かに外に跳ねた短髪、目は切れ長で銀灰色、顔だちは整っていて、何処か人間離れたような雰囲気さえている。年齢は二十歳前後。ソードよりも一つ、二つは下か。男の服も、騎士団のものだった。手は身の丈程の槍斧ハルバードの柄えの部分えを握っている。

「この国の騎士団の団長をしている。それより、悪かったな。リーシャ、ソード」

「あの……何で私の名前を？」

リーシャはそう言いつつ、この青年に何処か見覚えがあるような気がしていた。リーシャが思い出す前に、青年が口を開く。

「クロス・エンバルトだ」

「……ク、クロス……！？　じゃあ、手紙をくれたのも……」

「ああ。ま、こんなことになるとは思って無かったけどな」

青年　クロスが無表情にそう答えた時、何の脈絡もなくクロスの隣に生えていた立派な木が、何の脈絡もなくクロスめがけて倒れてくる。

「危ないっつー！！」

リーシャの声に、クロスが槍斧の刃を幹に、柄の底の部分を地面に突き立てるようにして木が倒れてくるところを止めた。だが、やはりというべきか、槍斧がミシミシと不気味な音をたてている。

「な、何今の……」

「チツ……またか。おい」

後半の呼びかけは、囲んでいた男たちにかけられたものだった。

「さっきの返答が未だだが？　俺の客に何の真似だ？」

「し、しかし……その女は、取り替え子に遭いかけた魔術師だと、巷では専らちまたの噂もっぱでして……」

答えになっていない答えを、先程迎えに来た男がしどろもどろに言った。

魔術師、という言葉に明らかに侮蔑の色が混じっているのを聞いて、リーシャは思わず俯いた。そんなリーシャを、クロスはちらりと見やる。

「……だから、何だ」

その言葉に、リーシャはハッと顔を上げる。

「俺が必要だったから呼んだ……それだけだ。テメエ等に有難迷惑ありがためいわくな世話焼かれる覚えはねえんだがな」

クロスの低く威圧感のある声に、囲んでいた男　騎士達　が、ひつと悲鳴にならない悲鳴を上げた。そんな騎士たちとは対照的に、クロスの口元に思わずゾツとするほどの好戦的な笑みが浮かぶ。

「さて」

クロスは槍斧の柄を掴み、木の幹から槍斧の刃を抜く。クロスが

半歩後ろに下がり、木がクロスの足元に倒れた。倒れた衝撃で、深緑の葉が舞う。

「それ相応の罰は覚悟してもらおうか」

クロスがリーシャの視界から消え、次の瞬間、リーシャ達を迎えに来た男の前に居た。その男が悲鳴を上げる前に、クロスが柄の部分で相手を弾き飛ばす。

「……速い」

ソードが放心気味に呟くのを、リーシャは耳で捉える。ソードもリーシャの傍に居る者として、十年以上身体を鍛えてきた筈だ。そのソードが、放心気味に相手を認める発言をしたのだ。

あの、僅かに残る記憶の中の幼馴染はもう、目の前には居ないのだと思った。

（それに……何だろう、何か変な感じが……）

あの不自然に倒れた木といい、リーシャにはクロスが悪い意味で人間離れをした“何か”を抱えているのではないか、と半分確信めいたものを抱いていた。

「これが、今のクロス・エンバルト……」

人が倒れる音が十何回目か響いた直後、足音をたてずにクロスはリーシャの前まで歩み寄って来た。ソードが反射的と言って良い動きで、リーシャを庇うように、リーシャの前に立つ。

そんなソードには気にも留めない様子で、クロスは口を開いた。

「リーシャ、怪我は？」

「し……してない、です」

リーシャは手が差しだされる前に、立ち上がった。

「……それより、驚いちゃいました。あの幼馴染が、こんなに強いなんて」

リーシャの嫌な予感を振り払うために作られた笑顔に、クロスは僅かに笑んだだけだった。

第四話「剣、警戒」

一国の城としてはやや小さめの城に到着した時、クロスは散々な格好になっていた。

鴉^{からす}が体当たりしてきたせいで白い制服には漆黒の羽が散らばり、突如として割れた窓ガラスの破片が髪の中で光り。その他の災難を間一髪で避け続けた結果、クロスの端整な顔にはひどい疲労の色が浮かんでいた。

シンプルなシャンデリアの光が照らす細い廊下で先頭を歩いていたクロスは足を止め、溜息を吐いた。

「え……と、エンバルトさん？ 大丈夫ですか？」

明らかに大丈夫ではないが、とりあえず尋ねてみる。

「……ああ、いつものことだからな。それより」

クロスがクルリ、と身体の向きを変えてリーシャへ向き直った。散々災難に合いながらも、切れ長の目に湛^たえられた光は、生気を失ってはいない。

「何故敬語なんだ」

「……だって、年上ですし」

幼い頃はソードが一番年上だったこともあり年齢のことを気にせず敬語を使わなかったが、流石に年頃になると妙にその辺を意識してしまう。クロスはまあ良いか、と呟いた。

「それより、ソード。お前、侍女に適当に空き部屋もらって休んではたらこうだ？」

「……何故俺だけなんだ？」

ソードのピリピリした空気。世間では殺気と呼ぶのだろう

ものを受けて耐えかねたらしいクロス言葉にも、ソードは無愛想に尋ね返した。リーシャは困ったようにソードとクロスを見比べて、口を開いた。

「ソード。少し、休んでいた方が良いわ。色々あったのだし、きつ

と疲れてるもの」

「それはお前も同じだろう。むしろ、お前の方が疲れている」

「それは……」

「否めない。先程直接攻撃を仕掛けて来たのは、ソード相手では無く、リーシャ相手だった。」

「リーシャもソードに倣い^{なら}身体を鍛えることはしているが、リーシャは戦闘というものをしたことが無いに等しい。対してソードは、時折忍びこむ賊相手に剣一本で相手して無傷で勝つような男だった。言い淀むリーシャを見兼ねてか、クロスが口をはさむ。」

「俺はリーシャに話がある。お堅いお前のことだから、リーシャだけ呼び出しても心配するんじゃないかと思ってお前も誘っただけだ」
「言い方は僅かに柔らかく包まれているが、つまりはソードは言い方を変えればオマケだ、ということになる。ソードは眉根を顰めた。」
「ああ、そうだな。先程の不意打ちや、貴様に降りかかる災難で行く前からしていた心配が更に大きくなった。よって、俺だけ休むというのは却下する。リーシャの御父上、御母上にリーシャを頼むと託されたのだ。何かあってからでは遅い」

「リーシャの家族は、そこそこの名知れた貴族で、ミドルシティに居る。だが、取り替え子に合いかけた魔術師を身内に抱えれば、その名声はあつという間に地に落ちてしまうだろう。それを知ったりリーシャは、自分を一人で暮らせることに渋る両親を何とか納得して、一人で両親が出した妥協案のソードも共に、という案のみ」
「ミドルシティのはずれで暮らしていた。その際、両親に泣ながらくれぐれも娘を頼むと熱心に頼まれたソードは、真面目な性格ゆえ、その頼みを忠実すぎるぐらいに護っている。」

「まさか、その真面目さ故の欠点が此処で出るとは　このままで　は、一国の騎士団長と喧嘩になりかねない。」

「ソ……ソード、私は大丈夫。だから、部屋を貰って？　話が終わった後、すぐに休憩できるように」

「……しかし」

「ほら、エンバルトさんも強いんだし。何かあっても助けしてくれるわ」

(本当はそんな確信は無いけど……)

リーシャは内心浮かんだ想いを、ぎこちない笑みで隠す。ソードは深く追求しようとはせず、溜息を一つ吐くと頷いた。そして、トランクケースを受け取ると今まで歩いてきた廊下を戻っていった。

リーシャはクロスに向き直る。

「俺が部下とグルで、隙を突くために強さを見せてお前を安心させようとした、とかは考えねえのか？」

「……そうだとしても、ソードと騎士団長が喧嘩することを避けるためにはこうするしかないんです。それに」

「それに？」

「私の記憶の中のエンバルトさんは、そんなことする人ではありませんから」

リーシャの裏表の無い笑みに、クロスはやれやれという風に肩を竦めた。

「参ったな。そういうところは何も変わってねえ」

「そういうところは、ってことは、他は変わってるんですか？」

「敬語。んでもって、昔は泣き虫だった。身長が伸びたっていうのは当たり前だろ。……ああ」

クロスの視線が、リーシャの胸辺りに留まる。薄いワンピースの上からでもわかってしまう、まな板な胸だ。

「胸はあまり変わってないか」

クロスがそう言って身体を反転し、歩き始める。失礼な発言に、リーシャは声にならない声を上げていた。

「……っ」

「おい、早く来い」

クロスが顔だけを此方へ向け、不自然に、不気味に揺れるシャンデリアを見上げて言った。

「……エンバルトさんの……」

「あ？」

「馬鹿！！」

リーシャは怒りに任せてその言葉を吐き出すと、ずんずんと大股で歩き始めた。

第五話「鍵は接吻!？」

リーシャがクロスによって通されたのは、どちらかという殺風景な応接室だった。

部屋には長方形型のガラステーブルを挟んでオフホワイトのソファが一脚ずつ置かれ、今は火の焚かれていない暖炉があるだけだった。目を引くのは、天井からつり下げられた豪華絢爛じゅうけんらんという言葉が合うシャンデリアぐらいだ。

「まあ、座れ」

クロスの言葉に、リーシャはソファに座る。クロスはそれを見ると、リーシャの向かい側のソファに座った。

「あの……」

「ああ、本題に入る」

言わんとしていることがわかったらしい。クロスは一つ頷き、口を開いた。

「そろそろ気付いているだろうが、俺とはあることが原因で不運体質になつてる」

「魔術師に呪いをかけられたんですか？」

薄々感じていた“悪い意味で人間離れた雰囲気”の原因。先程の襲ってきたクロスの部下の行動を考えると、今口にしたものしかリーシャには考えられなかった。

「そうだ、とクロスは頷く。」

「どうして、ですか？」

「……少し油断をしていてな。足を掬すくわれた、ってという言葉通りだ」
「それで、どうして私を？」

リーシャの問いかけに、クロスは笑って目を細めた。

「流石に、呪いの解き方までは知らねえか」

「あるんですか、解き方!？」

(もしかして、その魔術師にお願いして解いてもらうとか?)

だが、そんな物騒な呪い　相手を不運（というか超絶がつくだろう）ものを仕掛けた相手が、簡単に術を解いてくれるとは思わない。リーシャの考えを見抜いたのか、クロスは呆れたように笑んだ。「仕掛けた野郎が解いてくれるわけねえだろ」

「……じゃあ、なんですか？」

「取り替え子に遭った奴は通常の魔術師よりも優れた魔力を与えられる……だったな」

「そうです、けど」

取り替え子は、大抵妖精に好かれる。好かれるからこそ、妖精の力を借りる魔術師が子を攫うのだと聞いたことがある。魔力の塊とも言われる妖精が取り替え子に愛情を注いで魔力を与えるため、通常の魔術師よりも優れた魔力が、子の体内に入ると言われている。

「術を解くには、取り替え子の魔力が必要らしい」

そこで漸く合点^{がてん}がいった。だから、クロスはリーシャを呼んだのだ。

「でも、魔力を与えるってどうやって？　魔力を相手の体内に流して気を乱す、っていう術はあるみたいですけど、それだとエンバルトさんにかかる負担が大変なものになっちゃいますよね」

「そういうのは断固として断りてえな。これ以上何か負担があったらやってらんねえ」

クロスは冗談のような軽口で言うが、その言葉は冗談でも何でもない。ただでさえ超絶がつく程の不運体質になっているのに、更に何か負担があれば　クロスは間違いなく騎士団から追い出される、否、それ以上になるかもしれない。

「じゃあ、八方塞がりですね」

項垂れるリーシャに、クロスは口角を上げた。

「俺が八方塞がり承知でお前を呼んだと思うか？」

「あ、あるんですか！？　術を解く方法、それ以外にも」

リーシャがテーブルに身を乗り出しそうな勢いで尋ねる。クロスが苦笑して落ちつけ、とリーシャを宥^{なだ}めた。

「まあ、あるといえばある」

言葉を濁したクロスに、リーシャは首を傾げる。何だか複雑そう
だ。

「命がけなんですか？」

「……いや。そういうわけじゃねえんだが」

「接吻だ」

ドアの方から飛んできた第三者の声がそう告げる。その声には聞き覚えがあった。

「ソード！」

その声の主の名を呼ぶと共にドアの方を見やれば、仏頂面で、テ
ィーカップを乗せた盆を手に持ったソードが居た。

「侍女はどうした？」

「偶然出会ってな。頂いてきた」

「……お前の世話役殿は随分と警戒心が強いな」

皮肉をこめて告げたクロスに、リーシャは謝罪の意味を込めて頭
を下げるしかなかった。

「それで、ソード。せ、接吻って……」

「……接吻で魔力を相手に与えるという説は呪術を解くのに昔
から有効だ。妖精の立ち会う下、妖精が認める接吻を交わせば妖精
がその二人を祝福して相手方にも魔力を与えると聞いたことがある」
ソードはリーシャから僅かに視線を反らし、言いくそうに言葉を
紡いだ。

リーシャは顔を茹で蝟たこのように顔どころか耳まで真っ赤に染めて、
口をぱくぱくと開閉するばかりだ。

（せ、せせせ、接吻で……！）

この国で避けられる魔術師と言われるリーシャは、当然の如く接
吻どころか異性による抱擁ほうようを受けたこともない。それ故、ソードの
言葉はリーシャを混乱させるには充分だった。

「俺はリーシャが其処までしてこの男の呪いを解くことは無いと思
っている。何せ約束の一つも護れん男だからな」

ソードは苛立ったように盆をテーブルに置いて言う。

「そ、ソソソ、ソード！ あのね、あれは子供同士のお約束的展開
ってやつで……！」

リーシャは顔を真っ赤にしたまま、手を顔の前でぶんぶんと振る。
クロスは無表情で溜息を吐くと、湯気の上っていないティーカッ
プに口つけた。

「最後まで人の話を聞けよ堅物^{かたぶつ}」

「……何？」

ソードが眉根を寄せる。

「それも含めて呼んだんだよ。リーシャ」

コトリ、とティーカップの置かれる音で、リーシャは我に返る。

「俺と婚姻を結んでほしい」

第六話「不運との夕食」

「全く、何という奴だ！ あの結婚の話も、妖精の認める接吻……愛あるものを交わすために決まっている！」

ソードは与えられた小部屋で、忙しなく動き回りながら苛立ったように言う。リーシャは二脚ある内の一つの真っ赤なソファベッドに腰掛け、力なく笑った。

（結婚だとか、接吻だとか）

ソファの前の木のミニテーブルに置かれた、湯気の上っているティーカップを手に取った。カップに入った赤茶色の紅茶に、自身の複雑そうな表情が映り込む。

「リーシャ」

いつの間にか隣に来ていたソードが、咎める様な口調で言った。

「あの男と婚姻を交わす必要など、何処にもない」

「でも」

本人の目的に必要なためとはいえ、クロスがリーシャ自身を疎まなかったことは、ほんの少しだが救われた。ソードが言う程、悪い人にも思えない。

「リーシャ」

もう一度、ソードが名を呼ぶ。だが、今度は労わるような響きがあった。

「すまない。感情的になりすぎた。……お前もそうだろうか？ 少し、眠ると良い」

「ソード」

ありがとう、と呟いた声に、ソードは優しく笑む。

リーシャはカップをテーブルに置くと、横になる。ソードが柔らかい肌触りの毛布をかけ、髪を梳いてくれる。

リーシャは心地よさに身を任せ、静かに瞼を閉じた。

リーシャが目を覚ましたのは、それから六時間以上経った時刻だった。壁掛け時計の針は、七時十五分を指している。

この小部屋に一つだけある窓から外を見れば、外は黒い闇が広がっている。今日は月も星も出ていなかった。

「……ソード？」

ぐるり、と部屋を見回しても、ソードの姿は何処にもない。

(何処行ったんだろう。御手洗いかな)

そう思っていると、部屋のドアが静かに開いた。だが、其処から入って来たのは、ソードでは無い。

「エンバルトさん……？」

クロスが、湯気の上る食器を乗せた大きめの盆を手にして入って来たのだ。

花の咲き乱れる時期の夜は、騎士達がほぼ毎日と言って良い程、仲間と夕食を共にする筈だ。クロスは団長なのだから、まさか呼ばれてないわけでもないだろう。

「まさか、わざわざ夕食持ってきて下さったんですか？」

「それもあるけどな。俺がこんな体質だから、食堂のシャンデリアは落ちるわ、窓ガラスにはヒビが入るわで大騒動だからな。抜けて来た、というより追い出されて、今は部下が片づけやってる」

クロスはそう言いつつ盆をテーブルに置く。盆の上には夕食が二人分置かれていた。

首を傾げるリーシャに、クロスが苦笑した。

「お前と食ってこいってよ。ま、お前が嫌じゃなけりゃ、だが」

「い、嫌じゃないです」

夕食は、オートミール粥と温野菜だけだった。意外と質素だ。それにクロスが答える。

「騎士の夕飯はこんなもんだ。夜は食い過ぎると太るからな。太って動けねえ、なんて泣けるだろ」

「ああ、成程」

リーシャはいただきます、と言って口をつけた。

「なあ」

クロスが真剣な表情で、リーシャを射るように見据えた。リーシャは手を止める。

「俺が言いだして何だが、あまり難しくは考えるな。元はと言えば、自分自身の責任だからな」

自分が油断したのが原因だ、とクロスは自嘲気味に笑って言った。リーシャは意外な言葉に、言葉を詰まらせる。その時、ピシリと不気味な音が響いた。

その音の発生源　窓の方を見やると、窓ガラスの下方に小さなヒビが入っている。

「……おいおい、またかよ」

クロスが嫌そうに頬を引き攣らせるのもお構いなしに、ぴし、ぴし、と次々に窓ガラスにヒビが入っていく。

「しょうがねえ。部屋移すか。どうせ窓がこんなになっちまったんじゃ、お前らも部屋を移さねえといけねえだろうし」

クロスが盆を手に持ち立ち上がる。リーシャは頷き、自分とソードの分のトランクケースを手に持ち　ハツと思いつ出した。

「そ、そういえばソード」

クロスはああ、と思いつ出したように言う。

「アイツは食堂の前を通っちまってな。その頃、丁度俺の不運がフル稼働してたんで、片づけ手伝ってもらってたんだ」

リーシャは苦笑を零すしかない。真面目なソードが、人の困っている所を素通りする筈は　このクロスを除いて　無いに等しい。元々はクロスとソードも、不仲では無かった。ソードは、突然現れたクロスに過敏に反応しただけだろう、とリーシャは思っただけで、額いた。

「……それはそうと」

部屋のドアの前に歩み寄っていたクロスが、ふと思いつ出したようにリーシャを振り返る。リーシャは首を傾げる。

「お前、もう平気なんだな」

「何がですか？」

クロスは呆れたように肩を竦め、意地悪く笑ってみせた。

「さっきは接吻だ、結婚だと聞いて、パニックになってたじゃねえか」

クロスの言葉に、そのことを思い出した。リーシャの顔がみるみる内に赤く染まっていく。

その様子を見て、クロスは可笑しそうに笑って部屋を出て行った。

(ば、馬鹿……私の馬鹿！ 何で今まで忘れてたの!?)

リーシャが顔を真っ赤にするのを余所に、窓ガラスが、ガシャーン！

というけたたましい音とともに砕け散った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0143ba/>

魔術師と不運な騎士

2012年1月6日10時35分発行